

# 水圏環境動態調査

## 中間評価の概要

**調査研究課題名：**水圏環境動態調査

**研究の概要：**本調査は、将来再処理施設から放出された放射性核種が沿岸海域や陸域から河川を通して尾駁沼に供給された場合、それらが時間の経過と共にどのように拡散し、生物を介してどのように分配され、さらにどのような水域に分布・蓄積されて行くかを予測するための数値モデル（汽水湖尾駁沼—沿岸海域の生態系を考慮した放射性核種等の移行・分配・蓄積モデル）を構築することを目的としている。

**研究期間：**平成13年4月～平成18年3月

（但し、中間評価対象期間は平成13年4月～平成16年3月）

**研究成果：**

- 1) 生物学的パラメータ：尾駁沼の生態系内における放射性核種の挙動に対して重要な役割を果たしている、植物・動物プランクトン及びベントス等の種構成、現存量及び出現特性等に関するパラメータを得た。
- 2) 物理・化学的パラメータ：尾駁沼における湖流及び水質の変動を連続観測するとともに、湖水中の放射性核種等の濃度変動を調査し、統計解析を行った。
- 3) 放射性核種等移行・分配・蓄積モデル：フィールド調査によって得られたパラメータを使用して、流動モデル（平成13年度）、粒子追跡モデル（平成14年度）、低次生態系モデル（平成15年度）を年次を追って構築した。

**評価結果の概要：**調査研究の目的・目標、調査の手順・手法、スケジュールに関しては適切であると評価された。しかし、調査研究内容を考慮した場合、研究資源のうち、とくに研究者数が不足しており、拡充が望まれると判断された。少ない研究者数で非常に多岐にわたる調査を精力的に行なっており、得られた成果が国内外の権威ある学術誌に多数発表されていることから、成果としては十分であると評価された。構築途上のモデルも、尾駁沼の水域特性を高い精度で再現可能な状況にあることから、本調査は、適切かつ順調に進捗しているものと評価されると共に、更なる研究の発展が期待された。

**対処方針：**総合所見における評価結果及び各委員から寄せられた評価、意見及びコメント等を十分に検討し、今後の調査研究に反映させる予定である。